

特別編

資料館の生活用具

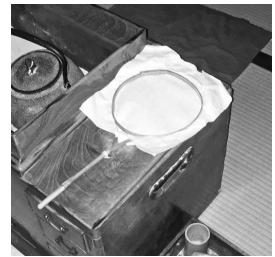
江東区深川江戸資料館

深川江戸資料館が開館して、32 年がたちました。去年は、トリップアドバイザー・東京都交通局「東京ベスト 100」の 52 位にランクインしました。日本国内はもとより、世界各国から年間 10 万人の方が訪れています。

常設展示室には、長屋をはじめ、大店、船宿など江戸時代末期の深川の町並みが再現展示されていますが、建物だけではなく、細かな生活道具まで、錦絵などの資料を基に、できる限り忠実に再現してあります。そこには、今から約 180 年前の江戸庶民の暮らしがあります。今日にいたるまでの間に人々のライフスタイルも大きく変化し、多くの生活用具が形を変え、姿を消していきましたが、来館者の皆さんは、資料館の生活用具を見て、懐かしいと感じる方が多いようです。今号では、来館者から質問の多い生活用具を紹介します。

かみほうろく
紙焙烙

船宿の長火鉢の上に置いてあります。江戸湾や大川（隅田川）に近く、掘割に囲まれた深川は湿気が多く、主に湿気たお茶の葉を、焙じたと言われます。焙烙は素焼きの土器が一般的ですが、紙焙烙は、曲げ物の底に和紙をかけ、長火鉢の火で焙ります。フライパンなどの道具の登場により次第に使われなくなりました。

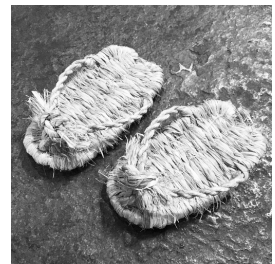
はちけん
八間

船宿の入口から室内を見上げると、紙を張った大きな笠に火皿を吊るした照明具があります。シャンデリアを思わせるこの照明具は、人のたくさん集まる所で使われる、盛り場らしい道具です。八間（約 14.5 メートル）四方を照らすという意味でこう呼ばれたようです。

あしなか
足半

こども用の草履と思われる方が多いのですが、足半草履は、掘割や池など湿ったところで仕事をする人が履きました。もとは室町時代の武将がこれを使っていたようで、戦場を足半をつっかけて走る姿は、絵巻物にも見受けられます。

藁は濡れると滑りやすくなり、また途中でめくれたりして危ないことから、敏捷びんしょうに働けるようにと、つま先とかかたが地面に付くように作られています。足の半分くらいの大きさしかないことから、「足の半ば」で足半草履となりました。船頭や筏師といった人たちが特に使っていました。展示室の町並みでも、船宿や船頭松次郎、木場の木挽き職人・大吉の家に、この足半が見られます。

がとう
瓦灯

釣り鐘型の素焼きの器の上に火皿を置き、普段はここに火を灯して使います。寝る時は火皿を中に収めます。すると蓋に入った切り込みからもれる光だけになり、光量を加減することができ、また、落下物が燃えることも防げるため、寝具のそばで使うことも多かったようです。江戸庶民の簡便な照明具として普及したのですが、原型は室町時代からあったもので、福井県の一乗谷遺跡から出土しています。瓦の土で焼かれており、瓦職人が作っていたため、この呼び名がついたといえます。材質は、当時広く使われていた浅草の今戸焼です。



たばこぼん
煙草盆

春米屋や船宿、水茶屋に置かれている正方形の箱が煙草盆です。銅や真鍮、陶磁器の器・火入れと、竹の筒・灰落としが入っています。火入れには灰の上に炭が載っており、煙草に火をつけるのに使います。竹の筒は灰落とし、時代劇で、煙管の先をポンとはたいて灰を落とす様子をご覧ください。時代劇で、煙管の先をポンとはたいて灰を落とす様子をご覧ください。時代劇で、煙管の先をポンとはたいて灰を落とす様子をご覧ください。



ほぐちぼこ
火口箱

台所に置かれています。中世・近世の発火には、火打ち石と火打ち鎌、火口、付木がセットで使われました。この4つを入れたのが火口箱です。火打ち石は石英などの硬い石を使用し、火打ち鎌は木に鉄を埋め込んであり、火打ち石と打ち合わせて火花を起こします。火花は、イチビの殻や蒲の花で作った火口に移され、さらに付木へ移し、火として使いました。付木には、杉や檜の薄片に硫黄がつけてあります。こちらも時代劇の中で、出掛けの人の肩口に火打石を打つ様子が見られます。厄除けの意味があったようです。



ひなわぼこ
火縄箱

船宿升田屋に置かれています。火縄と火打ち石を収めた携帯用の喫煙用具箱です。火縄で煙草に火をつけました。猪牙舟に持ち込んで使いました。



はいちよう
蠅帳

大吉の家に置かれています。虫は通さず、風は通す、冷蔵庫のない時代の食品の一時保存棚です。木枠に麻・紗などの布を張り付けてあります。昭和まで広く使われていました。



てんすいおけ
天水桶

多田屋や、2軒の船宿の前に置かれている、黒い桶（写真左）は、初期消火のために雨水を溜めておいた天水桶です。

梅の井と書かれた木の箱（写真右）、「ごみ箱ですか？」と聞かれることが多いのですが、天水桶の一種です。ごみ除けの竹すのこをかぶせて軒下に置かれ、雨水を溜めます。

「梅の井」とは、外観の一部のみ再現されている、第3の船宿の屋号です。



まくらびょうぶ
枕屏風

長屋には写真のような衝立が置いてあります。日中は押入れの代わりに布団を目隠しし、夜間は枕元に立て掛けて明かりやすきま風除けに使いました。全く使わない時には、二つに折って畳んでしまうこともできます。また、お気に入りの絵などを貼って楽しんだりもしたようです。



おぐぎ
折れ釘

土蔵の壁についている折れ曲がった釘は折れ釘と言います。折れ釘は、土蔵のメンテナンスに必要な壁土・漆喰といった材料などを入れた桶を綱で吊るしたり、足場の手掛かりにしたりなどに使われていたようですが、定説はありません。折れ釘のついていない土蔵もあります。おそらく地域や時代、あるいは土蔵の種類、造った職人によっても異なっていたと思われます。

